

論 文

ダイナ・クレイクの*John Halifax, Gentleman*における 障害者のエンパワメントと語りの技法

星 志乃(早稲田大学大学院)

序

ダイナ・クレイク (Dinah Craik, 1826-87) は、ヴィクトリア時代に多くの詩や児童文学、小説などを発表した作家である。当時、彼女の作品は英国内のみならず米国でも人気を集め、「ディケンズを除いたどの小説家の本よりも広く読まれている」(Kirk 406) と言われたほどであった。しかし作品の多くが家庭を舞台にした恋愛小説だったことやヴィクトリア朝の中産階級の理想を体现した人物を英雄として描く傾向もあってか、作家としての評価は彼女の晩年には「二流の女性作家 (“the second rank of women novelists”)」という位置づけになっていた (Mitchell 119)。さらに第一次世界大戦後にヴィクトリア朝の理想が批判を受け、「クレイクは文学史から姿を消した」と言われている (Mitchell 120)。しかし、20世紀末に創設された障害学 (disability studies) の台頭により英米文学における障害の表象が文学研究者によって論じられるようになると、障害が「継続的な関心事 (“a recurrent interest”)」であったクレイクの小説は学術的に注目されるようになった (Holmes 48)。「障害」の表記については、「害」の漢字に含まれる負のイメージから「障がい」や「障碍」とすべきとの議論もあるが、本論文では、障害は個人の身体機能の欠損にあるのではなく、「健常者」を中心とした社会の不配慮によってつくり出されるものであるとする障害学の「社会モデル」の考えに基づく表記を使用し、「障害」や「障害者」とする。¹また、障害のない人物について「健常者」という呼称の使用が一般的であるが、この呼称は障害／健常の二項対立を強調しかねない表記であるため、「非障害者」の表記を採用する。

クレイクにとって5作目の中篇である*John Halifax, Gentleman* (1856; 以下、JHGと略す)は、家庭領域に焦点を当てて若い女性の結婚を描いたそれ以前の作品とは異なり、19世紀半ばの理想的な男性像を主題にした作品である。本作は英国だけではなく米国でも大成功をおさめ、1850・1860年代の人気書籍ランキングにおいてハリエット・ビーチャー・ストウ (Harriet Beecher Stowe, 1811-96) の『アンクル・トムの小屋』(*Uncle Tom's Cabin*, 1852) の次の順位を獲得した(Hall 258)。この人気はその後50年続き、1898年までには11の出版社から出版され、アメリカでは1900年までに少なくとも45種類の海賊版が出回っていた(Mitchell 50)。ルイーザ・パー (Louisa Parr) によると、彼女が1897年にエッセイを執筆するまでにJHGは25万部売れており、うち8万部は直近数ヶ月での売り上げであった(248)。JHGは身体に障害があるフィニアス・フレッチャー (Phineas Fletcher) の一人称小説で、孤児のジョン・ハリファックス (John Halifax) が立身出世していく様子が語られる。ジョンは無一文の孤児から裕福な工場長へと出世し下院議員候補にまでなることから、本作は「サミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles, 1812-1904) の『自助論』(*Self-Help*, 1859) を予期している作品」とも言われ(Bourrier, *Victorian Bestseller* 92)、ジョンは「たたき上げの男性 ("self-made man")」と形容される(Bourrier, *Measure of Manliness* 53)。経済主体として活躍するジョンと、障害により経済活動に参加できないフィニアスという2人の登場人物は、ヴィクトリア朝の女性職業作家であるクレイク自身の野心と葛藤のそれぞれが投影されていると1975年にエレイン・ショウォルター (Elaine Showalter) が論じたことを契機に、本作に関する文学研究者の批評も増加した。² フィニアスに焦点を当てた先行研究としては、後述する主人公の男性性と障害者の非男性性に注目したカレン・ブーリエ (Karen Bourrier) の研究 (*Measure of Manliness* 52-75) や、障害者フィニアスの語りの特徴を認めつつもプロット上では完全に脇役に徹していると論じるクレア・ウォーカー・ゴア (Clare Walker Gore) の研究 (*Plotting Disability* 131-36)、語り手であるにもかかわらずフィニアス自身の身体的特徴や生活に関する詳細は語られない点を指摘するヘレン・ウィリアムズ (Helen Williams) の論文などが挙げられる。さらに、ジョンとフィニアスの関係を「疑似的婚姻関係 ("a quasi-marital

partnership”」(171)と呼び、フィニアスの看護を通じて引き出されたジョンの感情的豊かさが彼を理想の夫・父に適切な人物にすることや、フィニアスが与えた社会的ネットワークがジョンの出世に役立ったことを明らかにし、JHGがたたき上げの男性の物語ではないと指摘したタリア・シャファー (Talia Schaffer) の論考もある (170-73)。³

多くの先行研究でジョンの男性性やフィニアスの社会的役割・主体性の欠如が議論される一方で、フィニアス自身のエンパワメントや語りの技法に関する議論はほとんどされてこなかった。しかしながらジョンの出世を多様な個人的支援によって後押しするには、フィニアスにも行動主体性が要求されるはずである。それゆえフィニアスは、ジョンの物語を語る役目だけに留まらず、友人の出世と共に自己のエンパワメントも実現している人物ではないだろうか。本論文では「JHGは立身出世の方法を示している物語ではない」(173)とするシャファーの主張に基づき、社会的弱者としてのフィニアスの表象を検証しつつフィニアスがジョンに与えた知的・精神的支援の重要性を分析する。さらにジョンを理想的な紳士として印象付けるためのフィニアスの語りの技法の特色と、語りを通じたフィニアス自身のエンパワメントを明らかにする。ここでいうエンパワメントは、自己表現や自己主張によって主体性を強化することや、より重要な社会的役割を担ったりそれが拡大したりすることを指す。そこで第1章では社会的弱者としてのフィニアスがどのように描写されているかを確認し、第2章と第3章でフィニアスがジョンの出世のために果たす重要な役割と語りの技法を検証する。これらの考察によりこれまでジョンの理想的な男性性を引き立て、かつ維持する補助的役割ばかりが強調されたフィニアスの語りの重要性と、他者への貢献を通じてフィニアス自身のエンパワメントが遂げられていることと、さらにその限界を論じてみたい。

1. フィニアスの障害と他者性

JHGの語りを担うフィニアスは、前半において自分が病弱で不幸な人物だと繰り返し描写する。彼は皮なめし工場 (tan-yard) の経営者であるエイベル・フレッチャー (Abel Fletcher) の一人息子で、母を亡くし父と召使いのジャエル (Jael) と共に生活していた。本作では16歳のフィニアスと14歳

の孤児ジョンの出会いから、ジョンが54歳で亡くなるまでの出来事が語られている。第1章の冒頭でフィニアスは「手押し車」(JHG 1)を使用しており、「動いたり歩いたりするのがいつも苦痛だった」(JHG 1)事実が明かされ、彼の下肢の障害が読者に知らされる。⁴ジョンの整った顔や「長身で頑丈な」(2)体格に対する羨望を表しながら、フィニアスは自分自身を「貧弱なちびの障害者（“poor puny wrench”）」(2)と描写し、“strong man”としてのジョンと“weak man”としてのフィニアスの身体的特徴が強調される(Bourrier, *Measure of Manliness* 52)。健康的なジョンとは対照的に体調を崩しやすいフィニアスの特性は、「赤ん坊のように無力で役立たず（“helpless and useless”）の病弱な若者を一人息子に持つことは、父にとって、とてもつらいことだった。」(3)と、ネガティヴな資質として認識され、工場経営者の父にとって不都合な息子というイメージを読者に提示する。

このようなフィニアスの表象は、彼がヴィクトリア朝のジェンダー規範における理想の男性性に一致しないことを意味する。なぜなら「仕事(work)」は、ヴィクトリア朝の中産階級の男性性を構成する重要な要素のひとつだったからである。性別役割分業社会のヴィクトリア朝において、家の外で労働し賃金収入を得るのは男性の役割、家庭を快適に保つのは女性の役割と考えられていた。ジョン・ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)が提唱したように、「世間での荒仕事で、あらゆる危険や試練に遭遇しながら家長として賃金収入を得ることこそ男性の役割であると認識されていた(Ruskin 147)。こうした社会的背景を裏付けるように、“bread-winner”という言葉が使用され始めたのもヴィクトリア朝だと言われている(Tosh, *Manliness and Masculinities* 95)。勤労に適さない特



図 「病人に快適さを」『ランセット』
1856年

性を有する語り手のフィニアスはヴィクトリア朝男性の理想像を実現できない人物であり、そのためにフィニアスは自らの存在価値に対する深い苦悩を抱く。

フィニアスは障害によって移動性(mobility)を大きく制約されている。作品の冒頭で車椅子に乗ったフィニアスの介助の必要性が述べられるが、フィニアスが移動するためにジョンに頼る描写はこの場面に限ったことではない。不慣れな松葉杖を使わずに歩こうとした際にはジョンに支えてもらい、10マイル離れた街からの帰宅にはジョンに背負ってもらう必要があった。一方、介助者を必要としない車椅子は18世紀後半から記録があり、その普及率は19世紀を通じて高まったという(Bourrier, “Mobility Impairment” 64)。1856年3月22日に発行された医学雑誌『ランセット』(*The Lancet*, 1823-)には、病人用のベッドや椅子などの製造業者が、ヴィクトリア女王からの特許状を得たという広告が掲載されている(図参照)。広告では病人用のベッドや椅子が合わせて13種類紹介されており、9番のイラストは「自分で操作できる椅子(“a self-propelling chair”)」(<https://wellcomecollection.org/works/eq2aawvc>)と説明され、患者を自立させ、介助なしで部屋から部屋への移動が可能になると解説されている。こうした時代背景にもかかわらず、ジョンによるフィニアスの身体介助が頻繁に描写されることとは、他者に依存しなければ生活できない弱者の印象を与える。このようなモビリティの欠如はフィニアスの社会性を大きく損なっている。⁵ 実際、フィニアスは自分の生活を「きょうだいも友人もいない」(12)孤独で単調なものだと何度も嘆いており、社会から隔絶されたような状況にある。他者への依存性を強調しコミュニティからの孤立を招くフィニアスの障害は、彼を社会的弱者に位置付ける原因になっている。

同居する人々とフィニアスの関係も疎遠である。父エイベルは工場経営者として仕事中心の生活をしており、多くの労働者を雇う経済的強者である。孤児のジョンに慈悲を示すフィニアスに対し「働く者食うべからず(“He that will not work, neither shall he eat.”)」(21)と発言し、「彼(ジョン)はただの使用人だ」(50)と忠告するエイベルは感情的理由では他人に救済を与えない。エイベルの「特別領域(“especial domain”)」(11)と形容される応接間は硬いオーク材の床や高い背もたれの椅子、家具の少なさな

ビ冷徹な印象を与える要素が多く、障害や病気が原因で苦悩が絶えないフィニアスにエイベルが耳を傾ける気配は全くない。フィニアスにとってエイベルは唯一の肉親だが、弱者に情けをかけない社会的強者の父との間には大きな心の隔たりがある。加えてフィニアスの看病を担うジャエルは、「いつもできる限り長く、できる限りきつく私を縛り付けた」(25)と語られるように、行動範囲を制限しフィニアスを統制する。ヴィクトリア朝小説における病室での患者と看護者の関係は、「優しく、互恵的で、相互に作用しあうものとして描かれる」とミリアム・ペイリン(Miriam Bailin)は論じている(25)。だが、フィニアスがジャエルを「敵("an adversary")」(25)と形容するように、二人の関係は悩みを打ち明けられるような親しいものではない。こうしてフィニアスはジョンを除けば家庭領域と社会領域のどちらにおいても、周囲から疎外された〈他者(Other)〉なのである。

父親が社会的強者であれば息子の社会的立場も高いことが期待されるが、その希望は宗教的側面から否定される。経済的強者である一方、非国教徒のクエーカー教徒であるフレッチャ一家は、宗教的マイノリティのために他者化され社会的不利益を被っている。エイベルの工場の労働者は暴徒化した際に、非国教徒が当時の法律の保護外であることを理由にフレッチャ一家に放火を試みたほどである(“[N]obody'll get hanged for burning out a Quaker!”)(100))。フィニアスが「自由や正義は、あらゆる種の非国教徒にとっては無意味な言葉であった」(97-98)と述べるように、フレッチャ一家の人々は差別的扱いを受けても救済を求めてくる。フィニアスは個人としてだけではなくフレッチャ一家の一員としても、社会的制約を受ける弱い立場にある。

このように身体機能が原因でジェンダー規範から逸脱し、さらに社会性を欠いた人物として描かれているフィニアスは、公的領域において〈他者〉として位置付けられている。加えて家族とも親密な関係を築けず、家庭領域でも孤立した存在である。では、公的領域においても家庭領域においても弱者であるフィニアスは、どのようにジョンの出世を支援していくのだろうか。

2. フィニアスの貢献と語りによるエンパワメント

本作のジョンの最初の発言である「旦那様、私は仕事がしたいのです。お金を稼がせていただけませんか。」(3) からは、経済競争を勝ち抜き孤児から工場経営者へと出世しようとする行動主体性や生産的な中産階級男性としての資質が窺える。だが、ジョンのように一世代で財を成し出世した新興中産階級に対する世間的な評価は必ずしも好意的なものではなかった。デイヴィッド・キャナダイン (David Cannadine) によると、「1770 年代後半からビジネスや貿易で財を成し、ファッションや贅沢品に執着し、高い社会的地位を得るという虚栄心で土地を購入した、不器用で行儀が悪く、育ちが悪い中産階級の成り上がり者に対する非難や嘲笑が強まった」という (73)。新興中産階級は「利益ばかりを追求する卑しい成り上がり」で、社会秩序を乱す存在だと考えられていたのである (Cannadine 73)。ジョンが新興中産階級に対する偏見を回避するには、卑しさを否定する育ちの良さや利益追求だけに執着しないことを証明する慈善心を示す必要がある。本作のタイトルにもある通り、ジョンは商人 (tradesman) ではなく紳士 (gentleman) としての特性を示すことが求められるのである。

障害者フィニアスとの関わりは、ジョンの他者への思いやりを顕在化させる効果がある点で重要である。ジョン・トッシュ (John Tosh) によると、初期から中期にかけてのヴィクトリア朝では男らしさ (manliness) と紳士らしさ (gentlemanliness) は明確に区別されており、礼儀正しさ (politeness) は紳士の特質であった (*Manliness and Masculinities* 86)。OEDにおいて politeness は「親切な行いや礼儀正しさ、他人を尊重したり思いやったりする行動」と定義される (def. 3.a.)。ジョンが他人への親切心や尊敬を示す例として、フィニアスを介助する際に、フィニアスの尊厳を傷つけないよう配慮することが挙げられる。フィニアスが「人生で初めて、優しさという稀有なもの意味を知った」(27) と述べるように、ジョンは他者への思いやりを持つ人物であり自己の利益だけを追求する卑しい商人とは異なる。さらに結婚後のジョンは、身寄りがなくなったフィニアスを血のつながりのない伯父として自分の家庭に招き入れ、同居を提案するなどフィニアスへの恩義を忘れない。フィニアスとの同居やケアにより、ジョンは利益ばかりを追求する卑しい商人ではなく紳士として際立つようになる。

しかしながらジョンの優れた人格を証明する機会を提供するフィニアスは、「紳士としてのジョンの物語」を成立させるために従属的に利用される存在になってしまう。デイヴィッド・T・ミッチェル (David T. Mitchell) とシャロン・L・スナイダー (Sharon L. Snyder) は、物語は障害が持つ象徴性などを利用してそれに頼ってきたと批判し、そのような障害の表象を「語りの補綴 (“narrative prosthesis”)」、すなわち物語の展開をより効果的にする装置としての役割と論じた(49)。この視点に立つとフィニアスの障害は、彼の他者への依存性を象徴するための装置、およびジョンの紳士としての正当性を示す契機を与えるものとして利用され、フィニアスの弱者としての立場を際立たせることになる。

だが、「賢い助言者 (“a wise counsellor”)」(170) と形容されるフィニアスこそがジョンの出世に貢献した人物である。フィニアスとの親密関係を端緒としてジョンは皮なめし工場の職を得るが、職業の獲得は社会的地位向上の条件として不十分だったと考えられる。キャサリン・ホール (Catherine Hall) によると、さまざまな過程で動物の皮を扱う皮なめし業は極めて不快な仕事であった(259)。低賃金によりジョンは毎晩野宿をしており、肉体労働と野宿とが相まって清潔とは言い難い身なりであった。このような状況を開拓するため、シャファーが指摘したように、フィニアスがジョンに宿泊場所と識字力を提供したことは彼の身なりの改善と昇進に重要な貢献をしている(172)。

しかしさらに注目したいのは、ジョンのために行動する場面の描写を通してフィニアスは自身が成し遂げた事柄を語っている点である。フィニアスは、自分のかつての乳母サリー・ワトキンス (Sally Watkins) の家の空室をジョンが使用できるよう交渉する。「自分の傍らにもう一人、その人のために考え行動したい者がいるとき、こんなにも大胆になれる自分に我ながら驚いている」(38) というフィニアスの語りは、自分よりも社会的に弱い立場にいる他者との関係性が自己の行動力や主体性をどう変化させるかを示唆している。これまで障害により行動を制約してきたフィニアスが、他人のために主体的かつ大胆に行動するのは注目すべき変化である。この変化は救いや支援を必要とする他者の存在が、自己の潜在的な力を引き出しエンパワメントを実現する可能性を示している。すぐにジョンの名前を

忘れてしまうほど労働者個人に無関心なエイベルと異なり、フィニアスはジョンの生活という私的側面に関心を向けています。これには労働やビジネスから排除されたフィニアスならではの視点が活かされている。これは経済的な生産性や効率性を超えて他者の尊厳を重視する倫理的な視点であり、産業革命後に重要視された生産性や経済的競争力とは異なる性質を持つ。

さらに、フィニアスはジョンに対する優越性すら誇示することがある。ジョンから読み書きができるか問われると、フィニアスは「自分の博識さを誇らしく思い、微笑ままずはいられなかった」(12)と述べる。さらに、ジョンは「本のことは何も知らなかった」(12)という言葉は、フィニアス自身の優越性を示している。これは、常に弱者として支えられる立場だったフィニアスが持つ自己顯示欲を示唆するものである。

フィニアスの自己顯示欲は、エイベルの工場の労働者たちによる暴動の場面の語りにおいて再び強調される。フィニアスの教えによって識字力を習得したジョンは、皮なめし工場の労働者たちが暴徒化した際、彼らを鎮めるための誓約書をエイベルの代わりに書き、フレッチャ家の危機を回避する。ブーリエは、こうしたジョンの功績を本人に代わってフィニアスが語ることにより、トマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) の提唱する理想的産業リーダーに求められる寡黙さをジョンが維持できていると指摘した (*Measure of Manliness* 54-56)。ここで注目したいのは、暴動沈静化のカギとなった誓約書の署名を行う場面である。フィニアスが見守る中、誓約書の内容をジョンが滞りなく執筆したにもかかわらず、最後の署名を誰が書くべきか議論する様子が、ジョンとフィニアスの会話によって感情的にそして臨場感を持って語られる。

When about to sign the orders, John suddenly stopped. "No; I had better not."

"Why so?"

"I have no right; your father might think it presumption."

"Presumption? after to-night!"

"Oh, that's nothing! Take the pen. It is your part to sign them, Phineas."

(106)

上記の会話は、ビジネスに必要なジョンの高い問題解決力や冷静な判断力が称えられたのちに挿入される。エイベルの代わりにフィニアスが誓約書に署名する経緯の描写によって、彼は自分が工場経営者の息子でジョンよりも高い地位にあることを読者に再認識させる。また、誓約書がフィニアスの署名なしでは未完成であることは、暴動の鎮静化がジョン単独では不可能だった事実も明らかにする。署名という重要な行為の前景化により、フィニアスは自身のエンパワーメントを示している。

職業以外の文脈でも、ジョンの出世にフィニアスの貢献が重要な役割を果たしている。その例として、ジョンと貴族階級の娘アーシュラ・マーチ（Ursula March）の結婚の実現が挙げられる。アーシュラに対し強い恋愛感情を抱いていたジョンは身分差から彼女との結婚を諦め、発熱して寝込んでしまう。その間にフィニアスがジョンの恋心をアーシュラに伝えたことがきっかけとなってジョンとアーシュラの交際が始まり、ジョンも元気を取り戻すこととなる。病床でジョンに対する想いを募らせていました経験があるフィニアスだからこそ、病床のジョンを励ますために最も効果的な方法を見出せている。結果的にアーシュラと結婚したジョンは、美しい妻を持つ夫という社会的地位を手に入れ、さらに妻の財産によって工場を購入し工場経営者の地位も獲得するのであり、フィニアスの貢献は職業と私生活の両面でジョンの地位の変化を導いている。

とはいえ、フィニアスとジョンの関係性は友人以上に親密な関係として描写されていたため、フィニアスにとってジョンとアーシュラの結婚は安易に喜べるものではなかった。ジョンと出会った時からフィニアスは彼の立派な体躯の虜となっており、「自分の魂のようにジョンを愛した（“I, Phineas Fletcher, ‘loved him [John] as my own soul.’.”）」(12)と述べたり、「私のジョン・ハリファックス（“my John Halifax”）」(26；下線は引用者)と形容したりするなど、ジョンに対する強い愛情や執着心を示している。フィニアスがジョンに会えない日が続くとフィニアスの悲痛が述べられ、それまで孤独で退屈だった彼の人生にジョンがいかに彩りを与えたかが語られるなど、2人の関係には同性愛を想起させる描写が繰り返し出現する。これらを踏まえると、ジョンの結婚を実現させた一方で自身は生涯独身となるフィニアスは、一見すると自己犠牲に徹する人物のようにも見える。

ゴアが指摘したようにジャンルを問わずヴィクトリア朝文学作品に登場する障害者が、結婚のプロットの主役になることは極めてまれである（“Disability and the Marriage” 120）。

だが、血縁関係のない伯父という特殊な立場を利用して、フィニアスは父親のような言動をしていることに注目したい。アーシュラとジョンには長女のミュリエル (Muriel) と3人の息子があり、ミュリエルは先天的視覚障害を持っていた。息子たちが成長していくのに対しミュリエルはいつまでも幼く純粋で天使のような存在で「私たちに平和をもたらす子供（“our child of peace”）」(286) と描写されており、ジョンとフィニアスが最も可愛がっている子供であった。ある日ジョンが病気の子供を抱いた老女を助けハリファックス家で介抱するが、子供の病気が天然痘と判明する。ジョンとアーシュラは4人の子供たちへの感染を危惧し動搖するが、天然痘への免疫があるフィニアスが病気の子供を見守る役割を担うことでハリファックス家との隔離が可能となった。しかし真夜中に天然痘で亡くなった子供の遺体がある部屋にミュリエルが侵入してしまい、盲目の彼女は子供が死んでいることに気が付かず遺体に触れてしまう。注目すべきはミュリエルの侵入に気が付いたフィニアスが「私の最愛の子よ！（“my dearest child!”）」(335；下線は引用者) と、まるでミュリエルが我が子かのような発言をしている点である。盲目のミュリエルは常に他者の助けを必要とする人物として描かれ、それはフィニアスが父性的役割を担う機会となっている。フィニアスは結婚の機会を奪われがちな障害者の登場人物でありながら、自らの父性を語りによって強調し、疑似的な父親としての振る舞いを表現している。⁶

これまで見てきたように、ジョンの社会的地位の変化の過程にはフィニアス自身の重要な貢献の内容が付帯的に描写されている。フィニアスの支援は金銭のように明示的な支援ではないものの、ジョンの出世の実現に大いに貢献している。ジョンやミュリエルへの支援によって、フィニアス自身のエンパワメントも見いだせることが明らかとなった。

3. 障害者の語りにおけるレトリック

ここまでフィニアスの語りはジョンを紳士として演出し、他者への貢献

を語りながら自らの功績をも語っていることを確認してきた。ジョンの恋人のような友人であり家族の一員でもあるフィニアスは、私的領域のエピソードによってJHGを産業小説から家庭小説へと方向転換しているとブーリエは指摘したが(*Measure of Manliness* 71)、本章ではブーリエの主張を発展させ、フィニアスの語りのレトリックを明らかにしていく。

ジョンの商人としての生活が利潤追求に執着する人物として読者の目に映らないよう、クレイクは作中で取り上げる出来事とその順番に注意している。市川千恵子はエリザベス・ギャスケル(Elizabeth Gaskell, 1810-65)の『シャーロット・ブロンテの生涯』(*The Life of Charlotte Brontë*, 1857; 以下、『生涯』と略す)について、ギャスケルが繰り返しシャーロットの「女らしさ」を強調するのは、当時相反するものと考えられていた「書くこと」と女性としての義務の両立可能性を示すためではないかと指摘した(35)。市川によればギャスケルは作家としてのシャーロットと娘としてのシャーロットを交互に語り、シャーロットの作家としての野心が目立たないよう工夫している。伝記の内容が実在した人物か物語の登場人物かという違いはあるが、クレイクはギャスケルと同様の手法を採用していると思われる。第25章で製粉工場を購入後、ジョンが多く時間仕事を仕事に充てる様子が語られるが、その仕事の前後には妻や娘との時間を最優先にする彼の姿が描かれる。この描写によりジョンは仕事熱心でありながら家庭にも関心を向けていることが証明される。ジョンが活躍する公的領域からフィニアスは「排除されている」とゴアは指摘したが(*Plotting Disability* 131)、仕事以外の側面を語るうえでフィニアスが精通すべきは夫／父としてのジョンの姿である。伯父として生活を共にし、仕事以外の文脈におけるジョンの様子を観察できるフィニアスは、公的領域と家庭領域のジョンを交互に語ることができ、このようなフィニアスの語りによって紳士としてのジョンの姿が浮かび上がってくる。

公的領域と家庭領域を交互に語るだけではなく、2つの領域の融合をクレイクは目論んでいる。トッシュによればヴィクトリア朝において男性性と家庭生活(domesticity)は必ずしも対立するものではなかった。家庭を安定させ支配することが男性性の要素として考えられていたヴィクトリア朝において、家庭生活はむしろ男性性に不可欠なものであったとトッシュ

は述べている (*A Man's Place* 4)。第26章で織維工場 (the cloth-mill) の経営を開始したジョンは多忙を極め早朝から夜遅くまで家を留守にするが、ジョンが働く間フィニアスはミュリエルと共にジョンの工場の近くで午前中を過ごすようになる。「それから父(ジョン)は私たちのところにやってきて (“Then the father [John] would come to us and remain a few minutes”)」(342; 下線は引用者)、数分間娘をかわいがり、工場の様子をフィニアスたちに話したと述べられる通り、娘の工場への移動により、ジョンは帰宅せずとも父として的一面を示している。名前ではなく“*the father*”と表現する点からも、工場長ではなく父としてのジョンの姿が強調される。また第27章では毎日正午になるとジョンが娘を工場に連れていくことが習慣化し、それにより彼の工場で働く多くの労働者たちがジョンの「父親としての強い印象を持つ (“their strong impression of Mr. Halifax's goodness as a father”)」(352) ようになったと述べられる。フィニアスの語りは、ジョンが公的領域において視覚障害を持つ娘に対し愛情を注ぐ父親としての姿と仕事熱心な工場経営者としての姿を同時に表し、2つの役割の両立を示している。

語り手のフィニアスはジョンのビジネス上の成功や社会的活躍に何度も触れ、彼を英雄に仕立てていくが、ジョンの活躍のエピソードのあとには彼の家族に関する問題が挿入される。ビジネスで成功を収め続けるジョンは子供にも恵まれ幸せな家庭生活を送っているように見えるが、作中の出来事を見返すと彼は何度も危機に直面している。織維工場への蒸気機関の導入が成功し皆が歓喜に包まれた直後、ミュリエルが馬に轢かれる事故が起こるのはその最たる例である。加えてジェソップ銀行 (Jessop's bank) の倒産を恐れた人々の動搖の鎮静化にジョンが奔走した直後には、彼の息子2人とハリファックス家のガヴァネスの三角関係が発覚し、家庭の雰囲気の悪化と長男の家出を引き起こした。ほかにもジョンが製粉工場を購入し皮なめし業からの脱却を果たした際には、ハリファックス家と交流のあった貴族女性の不貞が判明する。ジョンの職業上の成功や公的領域での英雄的行為が語られた直後にはジョンの家族や家庭領域に関する大きな問題が発生し、ジョンの意識を自然に仕事から家族へと移行させ、家庭の安定に尽力する必要性を示すのである。さらにこのような語りの手法により、ジョ

ンの成功エピソードのインパクトが相殺され目立ちすぎるので防ぐ効果もある。これに類似した語りの手法として、ギャスケルは『生涯』で「シャーロットの文学上の成功と野心ができるだけ目立たないように（中略）孤独で単調な生活の描写を意図的に反復させる」と市川は指摘しているが（30）、ギャスケルの『生涯』の1年前に出版されたJHGにおいてクレイクは職業上の成功と家庭内の悲劇を反復させ、ジョンの成功と野心を目立たせない語りの技法を採用していたのである。これらのレトリックにより、良き工場経営者としてのジョンと良き父親としてのジョンの印象の両立が可能となる。

だが注目すべきはフィニアスとジョンの立場や関係性が変化するときに生まれる語りの空白であり、これはフィニアスの解消できない欲求不満を示唆する。ジョンの商人としての立場に変化が現れる最初の出来事として、エイベルの後継者代理への指名が挙げられる。工場経営者の実子であるフィニアスよりも血縁関係のないジョンの方が後継者としてふさわしい事實を顕著にするものだが、ジョンの昇進が決定する第8章と第9章の出来事の間には1ヶ月間の空白がある。ジョンの昇進を見届けたのちフィニアスは体調を崩して1ヶ月寝込んでいたことが第9章で明らかにされており、その間のジョンによる親切な気遣いのみが言及されている。

当初ジョンに同性愛を想起させる感情を抱いていたフィニアスが、ジョンとアーシュラの結婚を後押ししたことにも疑問が生じ得るが、ここでも同様の語りの空白がみられる。第20章で「かつて私のものであった愛に対して、他の人（アーシュラ）は第一の、最高の、神聖な権利を持っていた」（242）と述べるように、ジョンに恋愛に近い感情を抱いていたフィニアスにとってジョンの結婚は手放しで喜べるものではなかったはずだ。またフィニアスはアーシュラの美貌や優しさに対する好意も示していたため、ジョンとアーシュラの結婚はフィニアスの二重の失恋の上に成り立っている。二人の結婚後フィニアスは体調を崩しがちでほとんど外出できず、第20章と第21章の時間設定の間には冬と春の2つの季節が空白の期間として存在している。『男同志の絆』（*Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*）でイヴ・K・セジウィック（Eve K. Sedgwick）は、二人の男性と一人の女性によって構成される「性愛の三角形」において、二人の

男性間には強い「ライヴァル意識」があるトルネ・ジラール (René Girard) の著作に触れつつ提示した(21)。しかしJHGでは、ジョンとライヴァル関係にあるべきフィニアスが自ら身体的弱さを強調し経済活動からの脱落を正当化し、積極的にライヴァル関係を放棄する。フィニアスはジョンとの同性愛的関係やアーシュラとの結婚を断念し、ジョンを結婚させることで家長として家父長制度に適合した立場で公的空間における地位の上昇と安定を可能にしてきた。しかしジョンとの関係が変化するときに本作に挿入される語りの空白や時間設定の飛躍は、自らの欲求を抑圧してジョンの出世の手助けをするフィニアスの葛藤の表れであり、それをフィニアス自身では語れない証ではないだろうか。⁷生産的な人物が社会的に評価される時代に、フィニアスのような社会的弱者が周囲の関心や理解を得る難しさをこの語りの空白は示唆している。

結論

JHGはヴィクトリア朝中期の男性性をテーマにした小説だが、クレイクが取り上げたのは理想的な男性の姿だけではなかった。障害者という社会的弱者であるフィニアスが、ジョンの出世を実現させたり自己の優越性を主張したりするなど、彼が担う社会的役割とその重要性が描写されている。父親が債務者監獄に収容され、弟が精神面での健康問題を抱えていたクレイクにとって (Bourrier, *Victorian Bestseller 87*)、理想的な男性のみ活躍が認められる社会は抑圧的で窮屈なものだったのではないか。JHGは当時の理想的な男性もそうではない男性も活躍できる社会を描いており、家父長制度ではない社会を求めるクレイクの願いを表していると考えられる。⁸

放浪する孤児から最新技術を導入した工場の経営者になり、さらに地方議員の候補者にまで出世するジョンは、一見スマイルズが『自助論』で称賛した自己実現のために努力を惜しまない成功者の典型に見える。しかしフィニアスがジョンに施してきた援助や語り手としての工夫に着目すると、ジョンの立身出世は彼個人の努力や才能だけで成し遂げられたものではないことが明らかで、フィニアスは非障害者の出世に貢献する障害者だといえる。JHGは非障害者が1人で立身出世を果たす物語ではなく、障害者は非障害者をエンパワーする存在だと示す作品であり、非障害者の出世の過

程における障害者の活躍を描いた作品だと解釈できる。そして他者への支援を施しながら、フィニアス自身も自己主体性を示し、エンパワメントを成し遂げていることが障害者の語りへの着目によって明らかとなった。

しかしながら、社会的にフィニアスのエンパワメントは認知されにくく限定的なものであると言わざるを得ない。エイベルから経営後継者として指名されるのも結婚を実現するのもジョンであり、経済的文脈においても恋愛の文脈においてもフィニアスは男性性を奪われている。また、フィニアスの語りに見られる空白は、彼自身の葛藤や欲求不満など、非障害者から可視化されにくい障害者の苦悩を表していると解釈できる。自身の出世や結婚の可能性の放棄によってジョンの出世への貢献を可能とするフィニアスは、障害者のエンパワメントと自己犠牲の複雑な関係を示している。

注

本研究はJSPS科研費22K20003の助成を受けたものです。

- 1 近年の英米文学に関する国内の文献の例として小川公代は『ケアの倫理とエンパワメント』で「身体障害者」の表記を（131）、石塚久郎は『イギリス文学入門』で「障害者」の表記を採用している（430）。
- 2 クレイクが幼いころから父親は“pauper lunatic”として収容所に収監され経済的に頼りになる存在とは言い難く、JHGが出版されたころには債務者用監獄に収容されていた。それゆえクレイクは、自身と弟の生活を支えるために自ら生計を立てる必要があった。（Bourrier, *Victorian Bestseller* 11, 99）
- 3 ほかにもトマス・ロバート・マルサス（Thomas Robert Malthus, 1766-1834）の『人口論』（*An Essay on the Principle of Population*, 1798）で取り上げられた人口増加問題に対する一つの答えとしてフィニアスの伯父としての役目が挙げられることなどから、JHGは女性作家が扱えないと言われた経済や政治、科学に関するトピックを扱う小説だと指摘するヘレナ・グッドウイン（Helena Goodwyn）の論文や、JHGが「障害者を結婚物語や家族関係から排除する」19世紀小説の伝統を複雑化し崩壊させる（queer）点に注目すべきとするゴアの論文などもある（“Disability and the Form of the Family” 116-17）。
- 4 以下、JHGからの引用はすべて拙訳であり、原文の頁数を括弧内に示す。
- 5 ヴィクトリア朝の社会理論家ハリエット・マーティノー（Harriet Martineau, 1802-76）は『自伝』（*Harriet Martineau's Autobiography*, 1877）で、

手術で足を失った友人Eと共に歩いていると、「通りにいる人々全員が自分たちのことを見ているように感じてひどく不安だった」と回顧しており(46)、ヴィクトリア朝の身体障害者が孤立し好奇の的となるさまが見て取れる。

- 6 視覚障害を持つミュリエルは純粋無垢な資質が強調された人物で、家族や周囲の人々から愛されかわいがられる存在である。ウィリアムズがフィニアスの語りにおいてミュリエルの障害は「否定的ではなく肯定的なものとして表象される」と指摘するように(119)、ミュリエル自身の障害に対する苦痛や悲嘆は述べられない。
- 7 本論で言及した箇所以外に、第21章でエイベルの死亡とミュリエルの誕生が語られたあと、第22章との間には11年の空白がある。また、ジョンの次女モード(Maud)が誕生しミュリエルが死亡する第28章と、第29章との間には12年の空白がある。第21章はフィニアスが親族を失う一方、ジョンには子供が生まれ父としての社会的地位が確立する、両者の家庭環境に大きな変化がある時期である。さらに第28章と第29章の空白は、フィニアスが父性を示す機会を創出していたミュリエルの死に対するフィニアスの喪失感を表しているとも考えられる。
- 8 JHGの執筆後ではあるが、1869年にクレイクは養子を迎えており(Bourrier, *Victorian Bestseller* 165)、血縁関係や家制度を超えた家族の形を認めていたと考えられる。

引用文献

- Bailin, Mariam. *The Sickroom in Victorian Fiction: The Art of Being Ill*. Cambridge UP, 1994.
- Bourrier, Karen. "Mobility Impairment: From the Bath Chair to the Wheelchair." *A Cultural History of Disability in the Long Nineteenth Century*, edited by Joyce L. Huff and Martha Stoddard Holmes, Bloomsbury Publishing Plc, 2022, pp. 61-78.
- . *The Measure of Manliness: Disability and Masculinity in the Mid-Victorian Novel*. U of Michigan P, 2015.
- . *Victorian Bestseller: The Life of Dinah Craik*. U of Michigan P, 2019.
- Cannadine, David. *The Rise and Fall of Class in Britain*. Columbia UP, 1999.
- Craik, Dinah. *John Halifax, Gentleman*. Thomas Y. Crowell Company, 1897.
- Goodwyn, Helena. "A Woman's Thoughts About Men: Malthus and Middle-Class Masculinity in Dinah Mulock Craik's *John Halifax, Gentleman*." *Women's Writing*, vol. 28, no. 2, 2021, pp. 231-49.

- Gore, Clare Walker. “‘Of Wonderful Use to Everyone’: Disability and the Marriage Plot in the Nineteenth-Century Novel.” *The Routledge Companion to Literature and Disability*, edited by Alice Hall, Routledge, 2020, pp. 120-31.
- . *Plotting Disability in the Nineteenth-Century Novel*. Edinburgh UP, 2021.
- . “‘The Right and Natural Law of Things’: Disability and the Form of the Family in the Fiction of Dinah Mulock Craik and Charlotte M. Yonge.” *Queer Victorian Families: Curious Relations in Literature*, edited by Duc Dau and Shale Preston. Routledge, 2015, pp. 116-33.
- Hall, Catherine. *White, Male and Middle Class: Explorations in Feminism and History*. Polity, 1992.
- Holmes, Martha Stoddard. *Fictions of Affliction: Physical Disability in Victorian Culture*. U of Michigan P, 2009.
- Kirk, John Foster. *A Supplement to Allibone’s Critical Dictionary of English Literature and British and American Authors*. J. B. Lippincott, 1899.
- Martineau, Harriet. *Harriet Martineau’s Autobiography*, edited by Maria Weston Chapman. 3rd eds. Vol. 1, Smith, Elder, & Co., 1877.
- Mitchell, David T. and Sharon L. Snyder. *Narrative Prosthesis: Disability and the Dependencies of Discourse*. U of Michigan P, 2000.
- Mitchell, Sally. *Dinah Mulock Craik*. Twayne, 1983.
- Parr, Louisa. “Dinah Mulock (Mrs. Craik).” *Women Novelists of Queen Victoria’s Reign: A Book of Appreciations*, edited by Margaret Oliphant et al. Hurst and Blackett, 1897, pp. 217-48.
- “Politeness, N.” *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, September 2023, <https://doi.org/10.1093/OED/1147556432>.
- Ruskin, John. *Sesame and Lilies: Two Lectures Delivered at Manchester in 1864*. Smith, Elder & Co., 1865.
- Schaffer, Talia. *Romance’s Rival: Familiar Marriage in Victorian Fiction*. Oxford UP, 2016.
- Sedgwick, Eve K. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. Columbia UP, 1985.
- Showalter, Elaine. “Dinah Mulock Craik and the Tactics of Sentiment: A Case Study in Victorian Female Authorship.” *Feminist Studies*, vol. 2, no.2, 1975, pp. 5-23.
- Tosh, John. *A Man’s Place: Masculinity and the Middle-Class Home in Victorian England*. Yale UP, 1999.
- . *Manliness and Masculinities in Nineteenth-Century Britain: Essays on Gender, Family, and Empire*. Pearson, 2005.

Williams, Helen. “‘Blank Epochs’: Narratives of Disability in Charles Dickens’s *The Old Curiosity Shop* and Dinah Mulock Craik’s *John Halifax, Gentleman.*” *Victorian Journal*, vol. 122, 2012, pp. 117-28.

石塚久郎「病・障害」石塚久郎編『イギリス文学入門』、三修社、2023年、426-32頁。

市川千恵子「「女らしさ」のレトリック——エリザベス・ギャスケルの『シャーロット・ブロンテの生涯』」『ヴィクトリア朝文化研究』1号、2003年、24-37頁。

小川公代『ケアの倫理とエンパワメント』講談社、2021年。

図版出典

“Comfort for Invalids.” *The Lancet General Advertiser*. March 22nd 1856. <https://wellcomecollection.org/works/eq2aawvc>

Summary

A Disabled Character's Empowerment and Narrative Techniques in Dinah Craik's *John Halifax, Gentleman*

Shino HOSHI

Dinah Craik's (1826-87) *John Halifax, Gentleman* (1856) is a first-person narrative by Phineas Fletcher that relates the story of orphan John Halifax who moves from rags to riches. This study examines the representation of Phineas as a socially vulnerable man and an "other" in the public and domestic spheres due to his disability. It highlights the intellectual and emotional support that Phineas offers John and distinctive features of Phineas's narrative techniques to impress the reader with John's portrayal as an ideal gentleman.

John's relationship with Phineas is important in that it manifests John's compassion for others because John's care for Phineas foregrounds him as a gentleman than a tradesman merely seeking profit. There is a risk that Phineas, who provides John with the opportunity to prove his superior character, remains a subordinate figure used to establish the "story of John as a gentleman". However, Phineas's narrative describing John's rise to prominence emphasizes his contribution to John's success and his story.

To ensure that John does not appear as a man obsessed with the pursuit of profit, Phineas alternates between portraying him in the public and domestic spheres. His narrative even aims to merge these two spheres. Although unrelated by blood, Phineas, who lives with John as the "uncle" of John's children, can observe him in contexts outside his work is a privilege unique to a male disabled narrator.

However, the narrative gaps that emerge when their social positions and relationship change may be an expression of Phineas's unresolved frustration and unmet needs. Although Phineas demonstrates his own empowerment by contributing greatly to John's successes in life, he eventually abandons his own career and marriage. This highlights the limitations of the empowerment of disabled characters in Victorian fiction. The analysis of *John Halifax, Gentleman* reveals the paradoxical relationship between the empowerment and the self-denial of disabled characters in Victorian novels.

